

鶴岡市内の中学生・高校生、保護者の皆さんへ

タイ「子どもの村学園」国際交流派遣事業 派遣団員を募集しています

いつ 令和8年8月4日(火)～10日(月) 【6泊7日】
どこへ タイ国(主な滞在先:「子どもの村学園」)
募集人員 鶴岡市内に在住する中学校1年生から高校3年生 計6名
主催 鶴岡・タイ「子どもの村学園」友好協会
共催 鶴岡市・(公財)出羽庄内国際交流財団
参加負担金 5万円(食事代・諸経費) * 交通費・宿泊費は市が補助します
その他、パスポート取得費用等の経費は自己負担となります
応募要件 過去に当派遣事業、ラフォア市派遣事業、ニューブランズウィック市派遣事業に参加したことがないこと
帰国後に報告会での体験発表、会誌等への寄稿ができること
鶴岡・タイ「子どもの村学園」友好協会に加入できること
(年会費3,000円)



参加申込書は
こちらからダ
ウンロードし
てください



この派遣事業は…

タイ「子どもの村学園」での相互交流やボランティア活動を通して、日本とは異なる文化への理解を深め国際的視野を広げるとともに、交流のネットワークをつくっていくことを目的としています

タイ国「子どもの村学園」とは… (Webでは moo baan dek で検索!)

1979年に設立された児童養護施設で、タイ教育省から認可を受けた教育施設です。両親がいない子どもや貧困・家庭崩壊等の家庭の子どもを受け入れて授業と職業訓練を行っており、教職員を含む約150人程が共同生活を営んでいます。

派遣日程 (注: 案内時点での予定で、時間及び研修先等を変更する場合があります)

日 程	スケジュール	宿泊先
8月4日(火)	朝 庄内空港 出発 → 羽田空港 到着 昼 羽田空港 出発 → 夕方 タイ国 スワンナプーム空港 到着	バンコク都内ホテル
8月5日(水)	午前 子供財団訪問、タイ国進出日系企業訪問 午後 子どもの村学園へ移動	子どもの村学園
8月6日(木)	終日 子どもの村学園 滞在	子どもの村学園
8月7日(金)	終日 子どもの村学園 滞在	子どもの村学園
8月8日(土)	午前 子どもの村学園 出発 午後 泰緬鉄道、クワイ川鉄橋、戦争博物館等の視察研修	バンコク都内ホテル
8月9日(日)	日中 国立博物館、寺院、市場等、生活・文化関係施設 視察研修 夜 スワンナプーム空港 出発	機中泊
8月10日(月)	朝 羽田空港 到着 昼 羽田空港 出発 → 庄内空港 到着・解散	—

なお上記日程のほかに、6月～7月に開催する3回の事前研修会(語学学習・出し物練習等)と、10月頃に開催する活動報告会に参加していただきます。

応募方法

申込書と作文を **5月6日(水)まで、出羽庄内国際村事務局** に持参して提出してください(郵送不可)。

申込受付時間: 午前9時～午後5時(4/20(月) 4/27(月) 5/5(火)は休館日のため受付できません)

なお応募者が定員を超えた場合は、作文審査と面接による総合評価により派遣団員を決定します。

* 面接会(予定) 期日: 5月16日(土)午後(1組15分程度)

会場: 鶴岡市役所 別棟2階 第1会議室 (詳細は応募者全員に直接、連絡します)

【作文のテーマ】「私がタイに行きたいと思った理由」 * 字数は本文(テーマ・氏名含まず)700～800字

* 市販の原稿用紙、パソコンで作成・印字したものなど体裁は任意としますが、字数に注意してください。

【問合せ先】 鶴岡・タイ「子どもの村学園」友好協会事務局 (朝日中央コミセン内 TEL 53-3560) 時間: 平日午前9時～午後5時

* 申込書の受付に関するお問い合わせは、鶴岡市伊勢原町8-32 出羽庄内国際村 TEL 25-3600

(資料)ところで...『タイ』ってどんな国？



タイ王国

Kingdom of Thailand

面積：51万4,000平方キロメートル（日本の約1.4倍）
人口：6,605万人（2025年 タイ国勢調査）
首都：バンコク
民族：大多数がタイ族、その他 華人、マレー族等
言語：タイ語
宗教：仏教94%、イスラム教5%
日タイ両国は600年に渡る交流の歴史を持ち、伝統的に友好関係を維持している。長年の両国の皇室・王室間の親密な関係を基礎に政治、経済、文化等幅広い面で緊密かつ重層的な関係を築いており、人的交流は極めて活発である。
タイにおける在留邦人は70,421人（2024年）、タイへの日本人渡航者は約115万人（2024年）



出典：外務省ホームページ(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/>)地図は一部加工して作成



タイ「子どもの村学園」とのこれまでの交流経過

庄内国際交流協会（鶴岡市：山口吉彦会長）主催で始まったタイ国カンチャナブリ県にある「子どもの村学園」への派遣事業「ジュニア民間大使」（1989年～2002年）と、朝日村国際交流派遣事業（2003年～2007年）の両事業には、200名以上の中高生が参加し、訪問交流と合わせて物資等の寄付、ボランティア活動等を行ってきました。

参加した後、個人で再訪する方も多く、学園に1年滞在しボランティア活動に取り組んだ方や留学した方、国際協力機構（JICA）職員や青年海外協力隊員として活躍する方も輩出しています。

2023年には、ラチャイニ校長先生の求めに応じて、高山ひかるさん（鶴岡市出身）が大学を休学して学園で1年間、日本語指導などの活動を行い、卒業した今年、タイに青年海外協力隊として赴任する予定です。

また、タイへの派遣と合わせて、学園の関係者をこれまで4回、日本に招待するなどの相互交流を継続して行っており、令和7年度には学園の生徒2名と教員2名を招待して、市内中学校を訪問するなど交流活動を行いました。

令和元年度に鶴岡・タイ「子どもの村学園」友好協会（会員79名）主催で中高生の派遣事業が再開されることになり、コロナ禍による中止を経て、令和5年度と6年度に各8名を派遣しています。

今回の派遣は「子どもの村学園」の協力のもと、中学生及び高校生6名に加え、引率者として友好協会から会員2名、市から職員1名の同行を予定しています。



令和6年度派遣事業 参加者の声（感想文を一部抜粋し、掲載しています）

全文はこちらから

子どもの村学園で3日間、とにかく子どもたちと遊びの限りを尽した。日本ほど遊具やモノがあるわけではなく、タイ語もそこまで通じない、そもそも言語を扱える年齢ではない子どもたちも多い。しかし、子どもたちの印象的なところは、とにかく笑顔であることだ。常に他人の気持ちを汲み取るのが上手で、更に楽しい気持ちにさせようとしてくる。私たちが自然と心からの笑顔が滝のように溢れる。不思議な感情だった。この学園には、笑顔の魔法がかかっている。

学園の先生に子どもたちとの接し方について質問をすると、「長い時間、一緒にいると子どもたちが心を開いてくれる。そして私たちは家族になる」とおっしゃいました。国や貧富の違いはあれど、人間がコミュニケーションを取るうえで「時間をかけて相手を知ること」がいかに大切かを学びました。それから、子どもたちとできる限り川遊びや折り紙をして過ごしました。

3年ほど前に学園とのリモート交流会で知り合い、個人的に会いたかった少女とも再会することができました。その子に実際に会いたいと思ったことが派遣に応募したきっかけの一つだったので、必死にそのことを伝えたり、当時の写真を見せると彼女は私を思い出して、学園での最後の発表会では名前を呼んで応援してくれました。会って話ができて本当に嬉しかったです。

学園の子どもたちは異なる場所で生まれて、異なる事情を抱えています。しかし、年齢の違う子どもたちが兄弟のように支えあい、先生たちも親代わりとなって愛情を注いで絆で結ばれている様子は、本当の家族のように思えました。父親がいて母親がいて兄弟がいるのが家族だと思っていた私にとって、家族の形は一つではない、血縁だけが家族を形作るものではないのだと、自分の固定概念を覆されました。

戦争博物館では「死の鉄道（泰緬鉄道）」の建設の歴史を学びました。日本では詳しく学ぶことのない日本の歴史を現地で学び、不自由なく幸せに日々を過ごしている自分自身を見つめ直すきっかけとなりました。普通の生活ができることに感謝し、より多くの人がそのような生活を送ることができるようになってほしいと改めて感じる機会になりました。

私の将来の夢は山形県で教員をすることです。今回の事業を通して子どもと寄り添う上でとても大切なことを聞きました。学園の先生の「子どもと関わるうえで大切なのは長い時間を共に過ごすことだ」という言葉です。私が事業へ参加したことはたった一つの行動に過ぎませんが、その一つの行動がときに人を動かし、未来を変える可能性になるのかもしれないということをこの事業を通して学びました。

一緒に食事をした際、「お皿は自分で洗ってね」と教えてくれた男の子がいました。自分の皿は自分で洗う、小さい子でも自分で配膳など、自然にこなしている子どもたちに感心しました。場所の案内に自然についてきてくれたり、さりげない優しさに助けられた三日間でもありました。子どもたちから温かな気持ちをたくさんもらった気がします。

タイという異国の地で、言葉の壁を越えて心を通わせることができたこと、そして何よりも、子どもたちの優しさにふれたことが、私にとって最大の学びとなりました。彼らのように、何も持っていないように見えても、他者に優しさを持って接することができる人間でありたいと強く思いました。どんなに困難な状況でも、他人に対して思いやりを持ち続けることが、どれだけ大切なことかを感じました。

